

## 奄美大島瀬戸内町・古仁屋における学生調査と授業実践 －ワークショップ型授業 古仁屋たんけん隊－

嘉納英明<sup>1)</sup>・峰岸宏樹<sup>2)</sup>・平松みどり<sup>3)</sup>・山本裕未<sup>3)</sup>・仲間稚子<sup>1)</sup>

### Student field study and teaching practice －The Koniya exploratory group's workshop type class－

Hideaki Kano, Atuki Minegisi, Midori Hiramatu, Yumi Yamamoto and Wakako Nakama

#### 要 旨

本報告は、本学の学生が鹿児島県奄美大島の古仁屋小学校において実践した授業の記録である。学生主体の現地調査活動をふまえての授業の構成であり、ワークショップ型の授業形態である。内容は、奄美を題材としたものであり、ゲーム性に富み、子どもの五感を働かせる刺激的なものであった。

キーワード：ワークショップ型の授業、現地調査

#### Abstract

This is a report on the class given by Meio University students at elementary school in Amami-Oshima, Kagoshima. The class was a workshop-type and it was based on the students' field study of Amami-Oshima. Making use of local materials and games, it was stimulating enough to activate all five senses of the elementary school children.

**Key words:** workshop type class, field study

#### 1 はじめに

アイランドキャンパス事業（鹿児島県離島振興協議会主催）は、①高等教育機関の無い鹿児島県の離島を大学、短大等の学外活動の場として提供し、離島の有する豊かな自然や文化を理解してもらうこと、②地域住民も参加できる公開講座等の開催により、交流人口の拡大やUIターンの促進を図ること、以上の2点を主な目的としている。同事業は、「鹿児島県内の離島における未利用資源の活用について」等の特定テーマと、自由テーマの2つの領域に対してそれぞれ助成している。報告者（嘉納）は、平成19年度事業の自由テーマに「奄美大島瀬戸内町・古仁屋のシマ自慢に関する学生調査と実践活動」として応

募し、助成対象事業として選定された（助成金額25万円）。この事業は、成果報告書・提言書の作成と地域住民を対象としたシンポジウム（ワークショップ）等の開催を義務づけている。事業の趣旨をふまえ、本学の学生の主体的な学習計画とそれに基づく授業実践（ワークショップ）を離島の学校で試みることは、教師をめざす学生の基礎的な資質能力を培うだけではなく、離島の学校と子どもたちの生活の実態を肌で感じることができる貴重な学習機会になるものだと考え、応募した。

本報告は、離島振興協議会に提出した事業成果報告書に加筆補正したものである。なお、本報告全体の構成と補正は嘉納が担当し、各節はそれぞれ学生の執筆によるものである。

<sup>1)</sup> 名桜大学国際学部国際文化学科 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1  
Department of International Culture, Meio University 1220-1, Bimata, Nago City, Okinawa 905-8585, Japan  
e-mail: kano@meio-u.ac.jp

<sup>2)</sup> 名桜大学国際学部観光産業学科

<sup>3)</sup> 名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科

## 2. 事業場所及び実施期間

- 1) 事業場所 奄美大島瀬戸内町古仁屋  
(町立古仁屋小学校3年生)
- 2) 実施期間 平成19年12月15日(土)～12月19日(水)

## 3. <覚え書き>アイランドキャンパス事業の準備から実施に至るまで

10月10日、嘉納先生の研究室でメンバーの顔合わせと初めての奄美学習会を開いた。22日は奄美に関する資料配布とワークショップで着るTシャツのデザインを考えた。11月5日、奄美大島の瀬戸内町と古仁屋についての歴史と文化、自然についての学習を始めた。19日には、Tシャツも完成し学習の続きと授業の流れを確認。12月5日～7日は、授業に使う小道具等を制作した。10日は、授業の流れを確認したり修正したりした。13日も小道具を制作。14日は、持参するものを先生の車に詰め、明日の待ち合わせ時刻の確認をした。

一日目(12月15日、土曜日・晴れ) 午前8時に大学で待ち合わせをして本部港へ向かった。午前9時20分過ぎに本部港を出港。正午前に与論島、午後2時に沖永良部島、夕方4時30分頃、徳之島に寄港した。除々にコンテナや人の数が増えてくる。12月にしては波はなく、船の中は意外と過ごしやすかった。昼食と夕食は船内のレストランで食べた。午後8時40分に名瀬港に到着し市内のホテルへ到着。夜の街を散策し夕食をとりながら明日からの予定を確認した。

二日目(12月16日、日曜日・曇り) 午前7時に起床し、みんなで朝食バイキングへ!しっかり食べたらレンタカーに荷物を詰め込み、奄美パークへ出発!9時頃、奄美パークに到着。奄美の歴史や文化の展示物や再現物を見たりした。沖縄の方言や風景にどこか似ていた。午前11時前に奄美パークを出発し古仁屋へ向かう。午後12時半頃に古仁屋に到着し、旅館に荷物を置いて近くの食堂にて昼食。その後、各自、自由時間。午後3時半に旅館を出発し、ホノホシ海岸へ向かう。ホノホシ海岸の近くには、車エビの養殖場があった。海岸の石を見て、驚いた。ホノホシ海岸の石は本やインターネットで見たように本当に丸い形をしていたからだ。海の水が寄せて返す度にゴロゴロと音が聞こえた。旅館へ戻り、授業で使う小道具制作に取りかかる。午後8時頃、夕食をとり、また、小道具作りを再開した。授業で使うクイズを考えて、午前1時前に作業を終了した。

三日目(12月17日、月曜日・曇り) 午前7時に起床し旅館で朝食をとる。部屋に戻り、足りない材料を確認して買い物に出かけた。買い物から戻り、全員で古仁屋小学校に挨拶に出かけた。校長先生を始め、皆さん、快

く迎えてくれた。校長室で授業の内容やねらいを説明した。その後、1年生が体育の授業をしていたので縄跳びの授業に参加した。一人の女の子が跳べないのでいじけていたが、峰岸さんが跳べるコツを教えたり、一緒に跳んだりして最後には笑顔になった。その子も跳べるようになったのだ。休み時間に明日の授業でお邪魔する3年3組の教室に行き、担任の重村先生に挨拶をした。子どもたちとも少し仲良くなり明日の授業への緊張が少しほぐれた。その後、瀬戸内町役場へ向かった。急に出向いたにも関わらず、役所職員は、丁寧な対応をしてくれて嬉しかった。企画課の方に人口や町のイベント、町の歩み等、瀬戸内町についていろいろと教えて頂いた。授業で使うクイズの問題も一緒に考えて下さり、企画課の人達には感謝の気持ちで一杯だった(写真①)。そして、「海の駅せとうち」で、船職人の相川さんに大島紬のビデオ取材に出演してもらった。昼食を食べ、午後1時過ぎから取材を再開した。古仁屋海上保安署、瀬戸内町漁業組合、船津公園(三角公園)を取材した。夕方4時に旅館へ戻り、小道具制作の続きに取りかかる。その後、峰岸さんとマップに描く店を写真に撮るため出かける。小学校で明日使う道具のチェックをした後、宜野湾市出身で、現在、古仁屋小学校に勤めている呉屋先生と夕食を共にした。呉屋先生から古仁屋について、いろいろ教えてもらった。夕食後、旅館に戻り、小道具の準備をして夜遅く終了。



写真① 役場の企画課で聞き取り調査

四日目(12月18日、火曜日・曇り) 午前7時過ぎに起床し、旅館で朝食を食べる。食後、荷物をまとめて、瀬戸内ケーブルテレビへケーブルを借りに向かう。ビデオカメラ再生のためのケーブルを持参していなかったため借りることにしたのだが、合致するものがない。急遽、別の方法を考える。古仁屋小学校へ向かい、教室でリハーサルをする。その後、もう一度、「海の駅せとうち」へ向かい、相川さんの写真を撮る。旅館へ戻り、最終的な

打ち合わせをする。昼食を食べ、午後1時過ぎに古仁屋小学校へ着き準備を始める。いよいよ本番の時間（午後2時10分～2時55分）を迎え、今まで頑張って準備してきた授業が始まる。子どもたちにまずは自己紹介をして歌を歌った。「ともだちになるために」という歌である。沖縄ではほとんどの学校で歌われているが、奄美ではあまり知らないようだったが、平松さんが1回歌ったのを聞いただけで子どもたちはすぐに覚えて、大きな声で歌ってくれた。次に、私の担当のレク「リスと木」では、クラスみんなが説明を1回で理解して、動いてくれた。1人余るように人数を調整して余った1人を指示を出す人とした。その時、ただ指示を出すだけではつまらないので、歌に乗せ自己紹介をしてもらった。恥ずかしがっていたが、みんな頑張って大きな声で発表してくれた。次に○×クイズをした。手作りのマップを黒板に貼り、私たち探検隊がたどってきた道をもとにして出題した。子どもたちは問題をしっかり聞き、答えが発表されたら大喜びしたり、落ち込んだりして本当に素直だなと思った。映像を使った問題を出題すると真剣にテレビの画面を見たり、峰岸さんの話を聞いたりして答えを考えていた。1番難しいと予想していた音だけを頼りに答えを出す問題では、自分の考えを出し合いながら考えていた。最終問題はファミリーレストランの「Joyfull」に関する出題とあって、子どもたちはすごい勢いで食いついてきた。「Joyfull」の問題はメニューの並び替えのものだった。1グループしか正解できなかったが、とても楽しんでいるように見えた。そこで終了のチャイムがなり、私たちが感想を述べ、3組さんからもお礼の言葉を頂いた。校長先生に挨拶をして教室の片付けをし、子どもたちに年賀状を出すという約束をして学校を後にした。子どもたちは車の後を追いかけてきてくれて、なんだか寂しくなった。名瀬に戻る車内で終わったんだと思うと、疲れがどっと出た。夕食時、今日のことを振り返った。時間の制約のため、当初予定していた内容を削除したのは残念だったけど、嘉納先生から「おもしろかった。よかった。」という言葉を受けてとても嬉しかった。今日は随分疲れたけど、とても思い出に残る良い経験ができた。

五日目（12月19日、水曜日・曇り）船の出航予定時間は午前5時50分だったので、4時過ぎには起床し荷物をまとめて5時にはホテルを出た。船はコンテナの積み下ろしのため30分近く遅れて6時半に出港した。みんな早起きをしたのでお昼までゆっくり休んだ。お昼にみんな船のレストランにて昼食をとり、その後は思い思いの時間をすごした。予定より1時間遅れの午後6時過ぎに本部港に着き、大学で解散した。

なかまわかこ  
(仲間稚子)

#### 4. <実践>ワークショップ型授業 古仁屋たんけん隊

12月18日、私たちは古仁屋小学校3年3組で特別授業をした。授業の内容は、アイスブレイキングのための歌・レクリエーション、そして子どもたちが住む古仁屋の町に関するクイズを中心としたものである。子どもたちが自分達の住む町についてのクイズを考えるなかで、町の新たな魅力に気づくことができるようにとねらいを設定した。

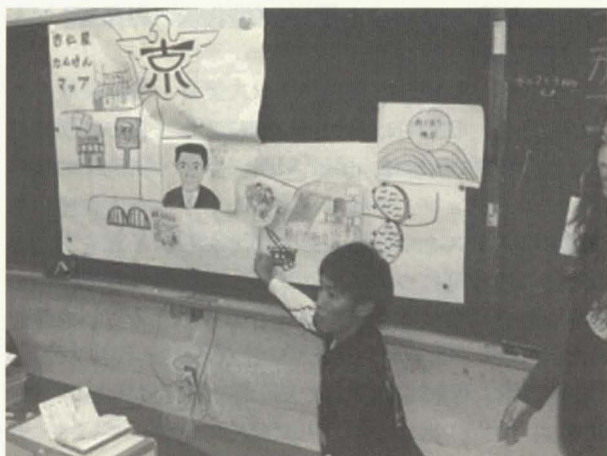
授業前日に学校を訪問した時、子どもたちと話すことができ、また、当日も楽しみに私たちを待っていてくれた。授業の始めに、歌詞指導を行いながら、「ともだちになるために」という歌をギター演奏と一緒に歌った。次に私たちも参加してレクリエーションを行い、子どもたちと手をつなぎ直接触れ合うことで、心の距離も一層縮まり、クイズへと移ることができた（写真②）。



写真② アイスブレイキング・レクリエーション

クイズは沖縄、奄美市、瀬戸内町の古仁屋と移動してきた「古仁屋たんけん隊」としての私たちの軌跡をたどりながら、黒板に貼った地図に沿ってペープサートを動かして、出題していくという方式である（写真③）。まず沖縄から古仁屋までの探検は、教室を○と×に分け、○×クイズで考えてもらった。ここでは沖縄と奄美大島の位置関係、奄美大島で有名なアマミノクロウサギやケンムン等に関して出題し、奄美をマクロの視点で捉えられるよう配慮した。子どもたちはしっかりとクイズ出題者の声を聴き、頭の中で知識を再構成して判断している様子が見え、答えが×で本当の正解を尋ねられたとき、子どもたちは嬉しそうに奄美のことを答えていた。

次は、私たちが探検しながら作成した「古仁屋たんけんマップ」を使って、子どもたちの生活空間、より身近で親しみのあるミクロの世界での新たな発見をねらいとして、クイズを試みた。ここでは五感のうちの「触る・



写真③ 古仁屋たんけん隊



写真④ 音だけを聴いて答えるクイズ

仁屋での経験はかけがえのないものになった。またいつか子どもたち、古仁屋の町に会いに行きたいと思う。  
みねざしあつき  
 (峰岸宏樹)

## 5. 活動をふりかえって

今回、アイランドキャンパス事業に参加することによって、日々の学生生活では経験できないことを経験し学ぶことができた。まず、奄美大島のこと、瀬戸内町のことについて知ることができたことである。はじめに、インターネットやガイドブック、文献から奄美大島の歴史や自然、名産について学習した。そして実際に現地に行くことで、より知識を深めることができた。特に印象的だったのは、古仁屋の町の人にインタビューをして、調査活動をしたことである。旅館の方々や役場の職員、漁協の人、大島紬の職人さんやお土産店の人等、たくさんの方から古仁屋の話を知ることができた。地元の人の話は文献やインターネットからは知ることのできないものばかりだった。次に、嘉納先生の指導の下、45分間のワークショップ型の授業を計画し実施したことである。子どもたちに奄美大島や古仁屋のことについて発見してもらえようという題材をクイズにしたり、子どもたちが飽きてしまわないようにクイズの出題方法を工夫したりした。

もっとも心に残っているのは、古仁屋の人たちと出会えたことである。突然訪れた私たちに親切に声をかけてくださったり、質問するといろいろなお話を聞かせてくださったりした。古仁屋の人たちとふれあうことで、人の温かさをとても感じた。また、子どもたちは明るく元気に私たちを迎えてくれた。すぐに名前を覚えてくれて、親しくしてくれた。ワークショップでも積極的に参加し、楽しく授業を盛り上げてくれた。子どもたちの笑顔を見て「古仁屋に来ることができて本当に良かった。」と心の底から思った。今回のアイランドキャンパス事業を終えて、これらの経験は私にとって大きな財産となっている。古仁屋の皆さんや古仁屋小学校の先生方、子どもたちに感謝したい。

ひらまつ  
 (平松みどり)

今回のアイランドキャンパスに参加して、小学生という普段あまり関わることのない年齢の子どもたちとふれあったことがとても新鮮であった。このプログラムの特徴のひとつとして、離島の学校での活動があげられる。私自身は島出身ではないので、離島の雰囲気などに触れることも良い経験であった。

今回は、古仁屋小学校の3年生に、自分たちの住んでいる古仁屋について再発見してもらおうという目的で、私たちは古仁屋探検隊となって、古仁屋や奄美について調

見る・聴く」を使って考え、グループで一緒になった友だちと相談しながら解答できるようにした。何が入っているのか見えないボックスにホノホシ海岸の丸々とした石を入れ触覚だけで当ててもらったり、テレビの画面を隠し大島紬を織っている音だけを聴いて何をしているところか話し合ってもらったりした(写真④)。具体的な事物から五感を通して考えたり判断したりすることは子どもたちの学習にとって大切であり、子どもたちの目もより輝いて楽しそうであった。古仁屋の「Joyfull」の人気メニューベスト3を当てる最後のお楽しみクイズの時には、子どもたちの楽しさもピークに達した。

授業後、子どもたちは「年賀状書くね、お返事書いてね。」「また来てね、バイバイ。」と車が見えなくなるまで見送ってくれた。私たちは45分という短い時間の中でも、しっかりと子どもの表情や声に呼応していくような心がけ、また子どもたちの「なぜ、どうして」を喚起できるようにした。そして、「わかった!!」という子どもたちの表情に出会えた私たちは、とても喜び、幸せを感じた。私たちにとって沖縄からの準備期間も含め、この古

べた。奄美に行く前にも自分たちで調べてはいたが、やはり実際に現地で資料館に行ったりして得ることの出来たものが有益であった。そのような中で強く感じたことは、その地域に住んでいる方々に聞くことが一番良いということであった。住んでいるからこそわかるその地域のことや伝統などがあるということである。そのように地域の人から直にうかがって知ることができたことが良い経験になった。

古仁屋小学校では、クイズ形式で古仁屋について子どもたちとふれあいながら授業を進めたが、私たちが事前に考えていたものが全部出来なかったことが反省点である。しかし子どもたちが、私たちの考えたクイズを一生懸命に考えてくれたり、大きな声で歌を歌ったり、また、挨拶を子どもたち自身からしてくれたり、学ぶ姿勢がしっかりできていることがとても良いことだと感じた。私自身も自分の行動について改めて考えさせられた。今回経験したことは、今教職を学んでいる私にとってとても良い経験であったし、この経験をこれからにつなげていきたいと思う。

やまもと ゆみ  
(山本裕未)

## 6. おわりに

瀬戸内町立古仁屋小学校の3年生の教室で、いわゆる、“飛び込み授業”を試みた。この“飛び込み授業”のために、4名の学生は私の研究室に集まり、市販の奄美情

報やネット情報を活用しながら、授業の準備を進めた。3年生の子どもたちは、社会科の授業で校区を中心とした地域学習をしているので、これをふまえた“飛び込み授業”の内容を考えることに頭を悩ませた。子どもたちが楽しく地域学習を進めるために、内容と方法について特に教材研究を要したからである。つまり、子どもが生活を営んでいる中で身近に感じている材料や情報を取り上げ、これにゲーム性を持たせながら、興味と関心を引き出すことに腐心した。その点では、レクリエーション的な活動を組み込みながら学習を始め、「古仁屋たんけん隊」を登場させ、○×クイズや五感を活用した出題は、子どもの関心を引きつける上で有効だったのではないかと考えている。一方、今回の“飛び込み授業”の準備と実施を通して感じたのは、地域学習を授業で取り扱うには、やはり現地での周到な調査をふまえた内容をどれだけ準備することができるか、が問われるということであった。市販本やネット情報は有益であったが、「生の地域情報はそこに行かないとわからない」ということであり、「生の地域情報をもとに学習内容を組み立てる面白さ」を感じた。古仁屋小学校の子どもたちは大学生とふれあう機会がほとんどなく、その意味では、教職を希望している学生と学びを深めたということは貴重な経験になったに違いない。また、本学の学生にとっても、離島の子どもたちに彼らの生活圏を題材にした授業を試みることができたことは、今後、教職を考えていく上で大切な経験になったものと思う。